

# 第100号記念号 震宝館だよりにみる 当館のあゆみ



題字・倉野光義師

震宝館だより 第100号  
平成23年9月20日発行  
和歌山県伊都郡高野町高野山3006  
財高野山文化財保存会  
高野山霊宝館  
電話0736-56-2029  
URL <http://www.rehokan.or.jp>

### 利用案内

開館時間  
5月1日～10月31日  
8時30分～17時30分  
11月1日～4月30日  
8時30分～17時00分

休館日 年末年始のみ  
大人 600円  
高・大学生 350円  
小・中学生 250円

専用駐車場あり

〔昭和57年（一九八二）7月30日発行創刊号〕

平成10年（一九九八）霊宝館本館、登録文化財に  
〔平成10年7月31日発行第50号〕

平成23年（二〇二一）霊宝館開館90周年  
〔平成23年6月27日発行第99号〕



昭和59年（一九八四）新収蔵庫（新館）落慶  
〔昭和59年7月5日発行第7号〕

## ◆平成大宝蔵完成◆

高野山霊宝館敷地内に待望の新収蔵庫「平成大宝蔵」が完成し、去る6月30日に竣工式が挙行されました。

高野山には開創後約1200年の歴史に培われた文化遺産が、総本山金剛峯寺を中心とする各寺院に膨大に伝わっています。その内、国宝23件、重要文化財187件の国指定有形文化財が存在し、その質量ともに日本有数の文化財伝存集中地域として良く知られています。

現存している高野山の文化財収蔵施設「大宝蔵」（昭和36年建設）の経年劣化が進んでいることや、空調設備を有しない施設なので高野山の低温多湿の環境に則さない面を持ち合わせていることから、空調施設等を兼ね備えた最新の文化財収蔵施設の設置が求められてきました。そして、平成13年度より3ヶ年計画で建設が行われ、この度、鉄筋コンクリート造平屋建、延べ面積1,665㎡の有形文化財収蔵施設として「平成大宝蔵」が完成しました。

国宝「木造八大童子立像」国宝「聲響指席」国宝「仏涅槃図」（金剛峯寺）をはじめ、国宝「動操僧正像」（普門院）、国宝「阿彌陀聖来迎図」（高野山有志八幡講）など、総本山金剛峯寺および17ヶ院所有の国指定文化財と、和歌山県指定文化財を収蔵する施設です。

竣工式は金剛峯寺住持延敏雄院下御導師のもと、金剛峯寺役員をはじめ国会議員、国・県の関係者、高野山真言宗宗会議員、山内寺院工事関係者など約100名が出席し、厳かに取り行われました。3年4夏工事の携わってこられた関係者の方々に感謝状が送られ、座主以下がお言葉を述べられました。その後、出席者は施設内を見学し、御導師等の説明に耳を傾けていました。



平成15年（二〇〇三）平成大宝蔵（収蔵庫）落慶  
〔平成15年8月1日発行第68号〕



大門の金剛力士像 県指定文化財に



### 霊宝館開館90周年 記念法要を奉修

霊宝館は、平十五日（日）に迎えました。本館紫雲殿正阿彌陀聖衆来迎館当時の展示を霊宝館設立発起、孝氏（二八四）発願造立の弘法、信平作、高野山真左、をお迎え、長親下の導師の厳かに執り行、当日は国内外、ご来館いただき

### 秋期企画展 「弘法大師と密教儀礼」

10月1日(土)～12月18日(日)

### 第6回高野山霊宝館もみじ祭開催

関西文化の日に協賛し  
平成23年11月7日(月)を  
無料拝観日といたします

### 第100号 目次

秋期企画展と第6回もみじ祭のお知らせ……………2～3

収蔵品の紹介④……………4

高野山の古建築 第四回……………5

赤不動明王と会津八一（前編）……………6～8

エッセイ 看取りあう仲間たち……………9

後山の女人禁制（第一回）……………10

霊宝館だより第98号掲載古写真中の人物について……………12

新収蔵品の紹介……………14

最後の博物館実習生を受け入れました……………15

霊宝館の庭園……………16

平成二十三年度秋期企画展

# 「弘法大師と密教儀礼」

期間 十月一日(土)～十二月十八日(日)



弘法大師及二大弟子像 電光院



弘法大師像(瑜祇大師) 電光院

## 主な出陳品(一部展示替えを行います)

### ■ 絵画

- 重文 五部心観
- 重文 十巻抄(図像抄)のうち二巻
- 重文 覚禪鈔のうち二巻
- 重文 八宗論大日如来像
- 弘法大師像
- 弘法大師像(秘鍵大師)
- 三尊大師像
- 愛染明王十七尊曼荼羅図
- 種子尊勝曼荼羅図
- 五秘密像

### ■ 彫刻

- 弘法大師坐像(萬日大師)
- 厨子入弘法大師坐像

### ■ 工芸

- 重文 密教法具のうち金銅独鈷杵・金銅五鈷杵
- 重文 秘密儀式灌頂法具のうち金・銀宝冠、明鏡
- 重文 花鳥文馨

弘法大師空海は、信仰の対象として、また密教修法の本尊として、古くから様々な姿で描かれてきました。本展では、そのようなお姿のうち、普段あまり目にする事のない大師像をとりあげ、知られざる弘法大師信仰に迫ります。

さらに、平安から鎌倉時代にかけての密教図像、灌頂などの儀礼に用いられた法具、修法に用いられた諸仏画の数々を展示、密教美術の世界をわかりやすくご紹介します。

高野山に伝わる名宝にふれ、密教の深き祈りの美をご堪能ください。

- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 西南院
- 西南院
- 西南院
- 善集院
- 西門院
- 電光院
- 親王院
- 金剛峯寺
- 西南院
- 西南院
- 電光院
- 金剛峯寺
- 清浄心院

# 「第6回高野山霊宝館もみじ祭」イベントのお知らせ

## ■ 長谷川智弘作品展 結びの世界「みやび」



被布蝶結び

仏教とともに、華鬘結びなどが伝わり、発展してきた日本の結び。その後、身の回りの大切な物を飾る身近な装飾として、多くの結びが生まれました。伝統的な檜扇や被布の結びをはじめ、現代の感性にも合う新しい結びの作品など、みやびな結びの世界をご覧ください。

日時：9月27日(火)～10月3日(月)

10:00～16:00

会場：当館迎賓館。入場無料。

## ■ ミュージアムトーク (秋期企画展 展示解説)

日時：10月30日(日) 14:00～15:00

会場：当館展示室。聴講無料 (ただし拝観料が必要)。事前申し込み不要。

## ■ 霊宝館館長講演会

秋期企画展「弘法大師と密教儀礼」開催に合わせ、弘法大師空海について 静 慈圓館長が講演します。

日時：11月6日(日) 14:00～15:00

会場：当館迎賓館。聴講無料。定員40名。要電話予約。

## ■ 秋の茶会と書道展

霊宝館の拝観者に高野山大学茶道部の部員がお抹茶のお接待を行います。合わせて、書道部の書道作品も展示します。

日時：11月12日(土)・13日(日) 10:00～16:00

会場：当館迎賓館。書道展は無料。お抹茶のお接待は秋期企画展をご覧いただいた方を対象とします。

※ 茶会はお菓子が無くなり次第終了させていただきます。

## フォトコンテスト テーマ「癒しの高野山」

3月11日に発生した地震と大津波。突然の災害により、多くの人々がお心を痛められました。人々の心をなぐさめる、高野山で撮影された「癒し」の写真を募集いたします。

応募期間：11月1日(火)～11月30日(水) 当日消印有効

応募要項：① A4版 (21×29.7 cm) にプリントされた作品。(プリント紙の種類は問いません。)

②撮影場所とその写真に関するコメントを200字程度で添えてください。

③作品の裏面に天地がわかるように上端に「上」と記載し、住所、名前、年齢(任意)を明記してください。

④応募者1名につき1点の応募。

お問合せ・お申込み 高野山霊宝館 TEL 0736-56-2029(代)



日輪大師像 三宝院

### ■ 書跡

- 重文 蓮華形柄香炉
- 鼎指定 手錫杖
- 五鈷鈴 (松虫鈴)
- 国宝 続宝簡集十二 御影堂御物目録
- 紺紙金字般若理趣經
- 金剛峯寺諸院家析負輯
- 青巖寺檢校法印代々過去帳
- 金剛峯寺檢校帳

- 竜光院
- 金剛峯寺
- 蓮華定院
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺

## 収蔵品の紹介 74



八宗論大日如来像

## 重要文化財

はっしゅうろんだいにちによらいぞう  
八宗論大日如来像

鎌倉時代 絹本著色

縦 55.5 cm 横 28.2 cm 一幅

善集院

高野大師行状図画  
巻第六（重文、地蔵院）より「宗論事」  
智拳印を結ぶ弘法大師。頭部から光が放たれています。

善集院 写真は2006年撮影。建物は現存しません。

円相中の蓮花座に坐し、智拳印を結ぶ金剛界大日如来像です。頭部が特徴的で、高く結い上げた髪には冠ではなく茶色いターバンのようなものを巻き、おろした後ろ髪（もしくはヴェール）は緑色であらわされま

す。「八宗論大日如来」の名前は、裏書に清涼殿宗論の時、即身成仏された姿である、といったことが記されていることに由来します。「孔雀経音義」や「高野大師行状図画」によると、弘法大師空海が唐より戻り、

密教を日本に広めようとしたが、諸宗の学僧がこの新しい教えを疑い、弘仁十年（八一九）、都の清涼殿にて七宗の代表と弘法大師が論議することになりました（八宗論）。このとき弘法大師が「即身成仏（この身のままで即時にほとけと一体化すること）」を実際に皆に示すため智拳印を結ぶと、光を放つ毘盧遮那仏（大日如来）へと姿を変えたといえます。これを目の当たりにした嵯峨天皇や諸宗の僧は驚きひれ伏したということ。この、八宗論の伝承に基づき、弘法大師の姿を描いたとされるのが本像です。

画面上には湧き上がる雲と、炎に包まれた黒い小円が七つ描かれており、これらは北斗七星をあらわしています。北斗七星が描かれる理由は不明ですが、密教では星は神格化され、古くから信仰されていました。本図においては七宗を象徴するとの説もあります。

所蔵寺院である善集院は宿坊ではないので、聞いたことがない方が多いかもしれません。善集院は正智院が管理するお寺で、大門通りから細い道を少し北に入った場所にありました。

(F)

連載

# 高野山の古建築

## 第四回 国宝金剛峯寺不動堂（三）

（公財）和歌山県文化財センター 鳴海 祥博

軒の隅の納まり



正面左の隅



背面左の隅



背面右の隅



臺股の彫刻



須弥壇の全景



須弥壇格狭間の詳細

金剛峯寺不動堂は中世を代表する建築として国宝に指定されています。今回は造形的な見所を紹介します。不動堂の外観の特色は、何

が異なっていることでしょうか。正面から見ると左右は同造りですが、実は軒の出の寸法が左右で異なっています。これは切妻屋根の建物の三方に、庇を取り付けて屋根を

葺き降ろし、その結果、入母屋屋根の形式が成立した、という建築形式の発展過程を物語るような造形となっています。

麗な格狭間の代表とされています。格狭間の内側の連子はあざやかな緑色の顔料が塗られています。漆塗りの外は漆塗りとされています。この漆塗りは「紫檀塗り」と言われるもので、茶色がかった「ウルミ漆」に朱漆で木目を描いたとても珍しい技法の漆塗りで、しかもその木目はとても美しく描かれています。

中央に如意宝珠を飾っています。このような唐草文彫刻は左右対称形で中央で絡み合う唐草文となっています。一つは中央に如意宝珠を飾っています。このような唐草文彫刻は中世建築には好んで用いられています。中でも不動堂のこの臺股は、洗練されたデザ

インと巧みな彫刻技法で、中世を代表するものと評価されています。次に内部の須弥壇を紹介しましょう。須弥壇はご本尊を安置するための仏壇です。その周囲に「格狭間」という曲線の削り抜かれた飾りがあります。不動堂の場合は、その輪郭は複雑に屈曲し、中央につぼみのような飾りがついています。曲線の輪郭は、蝙蝠が羽根を広げたように見えることから、特に「蝙蝠狭間」と呼ばれています。中世の華

須弥壇には飾り金具も散りばめられています。現在では黒くなっていますが、よく見ると細い鑿で唐花と唐草紋が一面に彫金され、金色もわずかに残ることから、最初は鍍金で輝いていたことがわかります。格狭間、紫檀塗り、金色の金具で飾り立てられた須弥壇は、現在見るよりも数段美しく輝き、仏の世界を演出していたに違いありません。不動堂の隅々には、美しい造形が散りばめられています。

# 赤不動明王と会津八一あいつばやいち（前編）

高野山高等学校教諭 山本 七重

はじめに

高野山では、毎年、四月二十八日に塔頭の別格本山明王院（高岡隆真住職）において「赤不動明王大祭」が行われている。

今年も山内外から霊験あらたかな赤不動明王を一目拝もうと多くの参拝者が訪れた。

昔は国宝だったこの赤不動明王は（現在は重要文化財）、大変有名であり、赤不動明王に対する信仰と憧憬から多くの一般の参詣者とはより、文人や学者が高野山を訪ねそのすばらしさに感動している。

さて、その中の一人に会津八一がいる。八一は早稲田大学教授として仏教美術を講じた美術史家であるが、歌壇と離れた立場から短歌もよくしたことで知られ、学者歌人としては折口信夫（釈迢空）とともに近代文学史上に燦然と輝く存在である。

る。

八一はその生涯に約千百五十首の歌を詠み、何冊かの歌集を出しているが、代表作は奈良の仏教美術や寺院を詠んだ『鹿鳴集』（昭和十五年刊）である。

この歌集の巻頭歌は、  
かすがのにおしてつきのほが  
らかにあきのゆふべとなり  
けるかも

というもので、よく学校の教科書にも採用されているほか、一番人口に膾炙された歌である。

この歌は、奈良の春日大社に歌碑が建立されており、八一の葬儀の時には高らかに二回朗唱されて棺を送り出したことでも有名である。

この八一が『山光集』（昭和十九年刊）という歌集のなかで十一首の連作短歌として赤不動明王を詠んでいる。

本稿ではこの連作短歌を読みながら赤不動明王に感動した八一の思いについて考えたい。

## 会津八一の連作短歌

まず、八一の「明王院」と題した連作短歌と詞書を記したい（歌の番号およびカッコ内の大意は筆者）。

明王院

昭和十八年十一月

十九日高野山明王院に於て秘宝赤不動を拜すまことに希世の珍なりその凶幽怪神異これに向ふものをして舌慄へ胸戦き円珍が遠く晚唐より将来せる台密の面目を彷彿せしむるに足る予はその後疾を得て京に還り病室の素壁に面してその印象を追想し成すところ即ちこの十一首なり

①さかもとのよがはのたきのいはのへにひとのみしとふくしきお

もかげ（比叡山の坂本の滝の岩の上に智証大師円珍が感得したという神秘的な姿がこの赤不動さまである）

②ひとのよのつみといふつみのことごとくやきほろぼすとあかきひあはれ（世の中の全ての罪を焼き滅ぼしてしまおうと赤不動

明王の真つ赤に燃え盛っている火の何と感動的なことだろう）

③うつせみのちしほみなぎりとしへにもえさりゆくかひとのよのために（人間の姿をして血潮をみなぎらせながら永遠に燃え続けていくのだから人の世のために）

④うつせみはあけにもえつつくりからにみはりてしろきまなこかなしも（身体は赤く燃えながら



重要文化財 不動明王二童子像〈赤不動〉 明王院

俱利伽羅に対して見開いて睨んでいる白い眼の身にしみて感動的であることだ)

⑤くりからのたがみにまけるたつのをのかがろきひかりうつつともなし(俱利伽羅剣の柄に巻きついている竜の尾の黒い光はこの世のものとも思われぬことであるよ)

⑥みなわたかぐるきひかりかむさびてよさへひるさへもゆるくりから(巻貝の蜷の腸のように真つ黒い光はこうごうしいままで

に昼夜を問わず燃えている俱利伽羅であることよ)

⑦もゆるひのひかりゆゆしみおのづからまなこふせけむどうじこんがら(燃える火の神聖で恐れ多いことを思い自ら眼を伏せたのであろうコンガラ童子は)

⑧はべりたつどうじがくちのどがりのはあなすがすがしとしのへぬれど(赤不動の傍らに侍り立つている童子の口の尖った歯は年月が経っているというのに何と清々しいことであろうか)

⑨いにしへのひじりのまなこまきやかにかくおろがみてゑがきけらしも(古の聖の眼ははつきりと見てこのように拝みながら赤不動を描いたのであろう)

⑩いまのよのゑしのともがらいにしへのかかるためしをしらざるなゆめ(現代の絵師たちは昔のこのような例をまったく知らないとはいえないはずだ)

⑪あかぶどうわがおろがめばときじくのこゆきふりくものきのひさしに(赤不動明王を私が拝ん

でいると季節はずれの粉雪が明王院の軒の庇に降ってきたことであるよ)

さて、この連作短歌では、赤不動明王の美術的な美しさと信仰の対象としてのありがたさが中心に歌われている。特に、連作中には感動を現す「あはれ」とか「かなし」などの言葉が使われており、八一の深い感動を感じることができる。

この「あはれ」は、日本文学の本質を現す言葉として有名であり、古

典文学の中にはたくさん用例が散見されるが、一般的には「しみじみとした情趣・感動・風情」のことであり、感動して思わず発する声「あはれ」が名詞になり、平安時代には形容動詞としても使われるようになったものである。短歌の表現としては、しみじみと心をゆり動かされる感動であり、心にじーんとくる感情を表すのに用いられるものである。

また、赤不動に対して八一がいかに畏敬の念をもっていたかについては、「かむさびて」や「ゆゆし」

以上のことをふまえたうえで、順に連作短歌を見ていきたい。

①は、この赤不動明王が描かれた伝承を詠んだもので、詞書きにも記されている通り、天台の智証大師円珍が横川の滝で感得したありがたい不動明王を描いたというのである。②と③は、不動明王の火焰や赤い身体など全体から感じられる、赤不動明王の人々への救済という誓願や慈悲の心を詠んだもの。④と⑤と⑥は、持物である俱利伽羅剣やその剣をじっと見つめる赤不動を通じて、この世の物ならざるありがたい姿を表現している。⑦と⑧は、赤不動本体から離れて脇侍である童

の言葉から推量することができる。「かむさび」は神々しい振る舞いや様子を表し、「ゆゆし」は神聖で恐れ多いことを意味する言葉である。特に「ゆゆし」は、神聖なものや触れてはならないものをさす「ゆ(斎)」を重ねてできた語といわれており、神聖なものに対して慎む気持ちを示すものである。

なお、八一には十首を超える連作短歌は少なく、それだけにいかにこの赤不動明王に感動したかが想像できる。

子に目を向けその姿を詠んだものである。一般的な不動明王の場合、脇侍は左右に侍立していることが多いが、この赤不動の画像には二童子が画面の右に描かれており、画像構成の上から大きな特徴となっている。このことに着目して、美術史家として赤不動明王の構図のすばらしさや細部に感嘆していることがうかがえる。⑨は、この赤不動を感得して描いた円珍を思い、このようならすばらしい画像をはっきりと眼に見ながら描いたのであろうと感動をもって思いを巡らせている。⑩は、すばらしい赤不動を見て、現在の絵師に対する批判とともに、年

月を耐えて残された芸術品(仏教美術)への感慨をも言外に詠み込んでいる。⑪は、今まで我を忘れて赤不動の画像に見入っていた世界からはっとして我に返ると、一転外には季節はずれの雪が降っており、不動明王の赤と雪の白い世界が好対照をなして美しくフィナーレをかざっている。

もう一度、連作短歌の全体の流れを簡単に見てみると、赤不動明王の描かれた伝承→赤不動明王の姿→持物→脇侍の童子→円珍への思い→現代の絵師への批判→荘厳な風景と世界への感動と余韻、といったようになろうかと思う。

細部から全体へ見事に赤不動明王の画像を短歌によって描いており、さすがに美術史家としての面目躍如たるものがある。

このように細部を描いて、対象の全体像や雰囲気表現するのは、八一の得意とするところで他の作品でもよく使われている。例えば、「はつなつのかぜとなりぬとみほとけはをゆびのうれにほのしらすらし」や「ふじはらのおほききさをうつしみにあひみるごとくあかきくちびる」などで、これらの短歌では「指」や「唇」といった仏像の一部分を取り上げただけであるのに、

全体的な仏像の雰囲気を感ずることができるといえる。

八一のこれらの連作短歌は、私たちにものを「見る」ことの大切さと難しさを教えてくれている。我々とはもすると対象を見たつもり、理解したつもりになっているが、本当は何も見えていないことが往々にしてある。たしか小林秀雄だったと思うが事物について「一分間じっと見ていると様々なことが見えてくる」といった意味の文章を書いていた。じっと凝視することの大切さをこの連作短歌を通じて感じていただきたい。

なお、この連作短歌の前後にも真言宗寺院などを詠んだ短歌が散見されるが、高野山の仏教美術を直接詠んだものは意外に少なく、それだけにこの連作短歌は貴重な作品だと思ふ。

仏教美術研究家としての八一は奈良への探訪が多かったが、折りにふれ奈良を拠点として周辺の有名な寺院にも足を延ばしている。高野山関係の寺院では遺跡本山となっている河内長野市の観心寺や京都市の神護寺などについても歌を残しており、これらの作品についても、機会があれば紹介したい。

(次号に続く)



## Essay

## 看取りあう仲間たち

高野山大学准教授 井上 ウイマラ

パーリ經典の増一部に、出家修行者がしばしば反省すべき項目をまとめた『十法経』という教えがあり、その最後は次のような項目になっています。

「私は、特別な聖なる知見をもたらす超人法を獲得しているだろうか？」

阿弥陀如来及両脇侍立像  
五坊寂靜院

か？ 最後の時に修行仲間から問われて赤面することがないようにしよう」としばしば反省すべきである。

超人法とは、解脱や悟り、そしてその基礎となる三昧や禅定のことを指します。ブツダが生きていた当時の修行者たちは仲間の最後を看取りあい、臨終に際して「あなたは出家した目的である解脱や禅定などを得ることができましたか？」と問われ、とても大丈夫なように日常の修行を心がけていたようです。

私はこの『十法経』が好きで、イギリスの僧院で修行していた頃によく唱えていたものです。それから十数年の時が流れ、高野山大学でスピリチュアルケアを教える今になってみると、こういう形で死の看取りや

死別後のグリーフケアに深く関わるようになったことに不思議な因縁を感じています。

高野山に来たばかりの頃、伽藍を歩いていて気になる建物がありました。不動堂です。なんとなく周囲の建物とは雰囲気が違うのです。立て看板の説明には「一心院谷から移築されたものであると書かれています。『不動堂と八大童子像』（高野山霊宝館）に収録された「不動堂の建立と沿革」（鳴海洋博）を読んでみると、移築前の不動堂周辺は阿弥陀堂と浄土を思わせる庭園が配置されていたようです。また、不動堂内部の須弥壇の大きさは本尊とされる不動明王坐像や脇侍の八大童子像を置くためには狭すぎ、おそらくは五坊寂靜院に伝わる阿弥陀三尊像が本尊であったらしいといえます。

『往生要集』を著した恵心僧都源信（九四二—一〇一七）らが始めた二十五三昧講は、念仏を修行して浄土に往生することを目指した結社で、仲間の誰かが病を得て死期が近くなると「往生院」に移し、臨終行儀に従って丁寧な看取りをおこなったそうです。二十五三昧講は、葬儀や死者供養をする講集団である念仏



不動堂内部

講などの原点となりました。

おそらく不動堂は、二十五三昧講に結集した念仏聖と呼ばれる修行僧たちが看取り看取られる修行をするための道場（往生院）ではなかったかと思われま。考えてみれば、スピリチュアルケアはそうした先達たちの看取りあう営みを現代社会に合わせて再構築するための窓口となるものです。

不動堂になんとなく心を惹かれた意味が分かったような気がいたしました。

## 高野山の文化

## 後山の女人禁制 (第一回)

元高野山大学教授 日野西 眞定

後山は、岡山県英田郡にあり、今でも女人禁制を守っている。日本の山岳霊場では、この他に有名な大峯山があるが、この方は、禁制の場が、大分狭くなっており、研究も進んでいる。しかし、後山の方は、これまでにあまり研究はされておらず、今回、同山を管理している道仙寺住職林晃州僧正から、私に調査依頼があり、貴重な資料を沢山送って戴いたので、これを九月三・四日に、京都聖護院で行われる日本山岳修験学会で研究発表を致したいと、目下纏めている最中であるが、古風な山岳道場形式を残した第一級の霊場である。そこで、まず、その中心である女人堂と奥の院を紹介したいと考える。

## (一) 奥の院

高さ一千三百mの山上に見事な石造の道場を建設している。明治時代に建立されたものである。周囲は約五十m位の傾斜した積み石が基礎を構成している(写真1)。

本堂の手前に一箇の巨石が存在するが、これは「胎内くぐり」と呼ばれている。基礎部に人が一人潜れるほどの穴があり、その奥に「隠れ地蔵」が祀ってあるが、これを拝むと、「生まれかわる」ことが出来ると信じられている。

そこを出ると、本堂に入る石の階段があり、そこを過ぎると「籠り堂」がある。参詣者が籠もるための堂である。中に石造の約五十〜六十cmの不動明王と役行者が祀られている。

さらに進むと、本堂が有るが(写真2)、その中には護摩檀があり、



写真1 奥の院の基礎を構成する積み石



写真2 奥の院の本堂

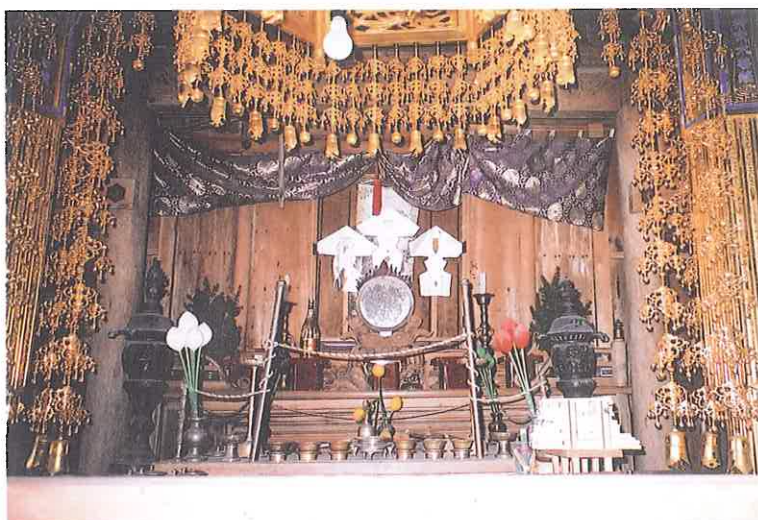


写真3 本堂内部



写真4 後山八代龍王神

本尊不動明王が祀られている（写真3）。その前面の棚に「奥の院神文」の「ありがたや、四十八行無事にすみ、利益さづかる今日のうれしさ」を板に書いて、「大先達大谷四郎」が奉納している。入口の女人堂からここまでは、四十八箇処の行場があり、それを参り終えると、行が終わると信じられている。

口側に木造の頑丈な戸が建立されている。これは新しいもので、数十年前に女性の信者が設けたものだという。その女性自身も、この古い洞窟に、不思議な魅力を感じたものと思える。

もちろんここは女人禁制で、女性は見ることができないので、写真か何かを見せられたのではないかと推察されるが、住職さんにお尋ねしておかなければならないと思う。

私の感じでは、ここは古い「胎内

くぐり」の場ではなかったかと思える。奥の院に参詣して来た信者達は、暗い洞窟の中を巡ることにより、また本尊の加持力により、これまで自分が犯した罪・けがれを払い、清浄な体になると信じた時代が長く続いたものと思われる。今はその信仰が薄らいでいるが、これに代わって胎内くぐり石が生まれたのではないかと思われる。

この山の麓に、「後山八代龍王神」と呼ばれる、不動明王の劔をシンボ

ル化した明神が祀られてある（写真4）。山上にいる龍神で、水源信仰を持ち、雨乞いの時に祀られる由である。ところがこの尊には、トラ比丘尼がこれを祀っていたという伝承があると伝えられている。トラ比丘尼とは、柳田國男達が注目された古代日本で盛んに活躍した女性宗教者のグループである。この伝承がここにも存在するということは、この地区の信仰の発生の古さを示しているように考えられる。

## 靈宝館だより第九十八号掲載

# 古写真中の人物について



写真1 高野山大学で教練を視察



写真2 堀田真快館長に先導され靈宝館を發つ

靈宝館第九十八号に「戦前の高野山」として二枚の写真を紹介しました。高野山大学での軍事教練の様子を写したものの（写真1）と、人力車で靈宝館を訪れた将校を写したものの（写真2）です。この写真を所有されていた下名迫藤治氏はすでにお亡くなりで、これらの写真について分かることはありませんでした。この

ことから、写真中の人物についての情報をお寄せいただきたく、お願いいたしました。この度、早速に情報をお寄せいただき、人物の特定ができ、新たな写真がみつかりましたので、ご報告いたします。

まず、写真中の人物について、中江宗圓様から情報をいただきました。写真1の中央の人物、写真2の前の人力車に乗る人物は李王殿下（李煥）で、後ろの人力車に乗るのは妃の梨本官方子妃殿下であるとのこと。写真1の右手前は三笠宮殿下であろう、とのこと。中江様は、航空士官学校を出られ、戦時中は仙台で飛行隊の教官をされておられ、なんでも、昭和十九年（一九四四）に第一航空軍司令官として仙台におられた李王殿下に親告を受

けられたということ、間違いないとのことでした。そして、後ろに参謀が二人、ついてることなどから、李王殿下が中将で、留守第四師団長として大阪におられた時の写真であろうと、李王殿下の軍人履歴などの資料をいただきました。その資料には、昭和十五年（一九四〇）五月・留守第四師団長、昭和十五年十二月に中将、昭和十六年（一九四一）七月第五十一

師団長、昭和十八年（一九四三）七月第一航空軍司令官とあり、昭和十五年十二月から昭和十六年七月までの間に撮影されたものと分かりました。

そこで、その間に李王殿下が高野山に來られた記録がないか、県立図書館にレファレンスサービスをお願いしました。すると、大阪朝日新聞の昭和十六年六月二日・三日に「李王兩殿下 奈良、高野山御成り」「李王兩殿下 高野山の英靈追悼会に御参列」の記事がありました。記事によると、六月一日午後四時三十三分に高野山駅に到着、金剛峯寺で宿泊、二日には金堂参拝など行われ、午後五時一分に高野山駅を發たれたとのこと。

日時が判明したことで、高野山時報を調べる事が出来ました。昭和十六年六月八日発行の高野山時報に更に詳しく載っていました（左頁参照）。記事通り、近藤執行が伽藍をご案内されている写真が新たにみつかりました（写真3）。

以前紹介した古写真から分かった事を人物中心にご報告しましたが、中江様のお話で印象に残ったことをもう一つ。写真1に木の根元で武器を構えた二人が写っています。初め望遠鏡か、訓練用の道具かと思つて

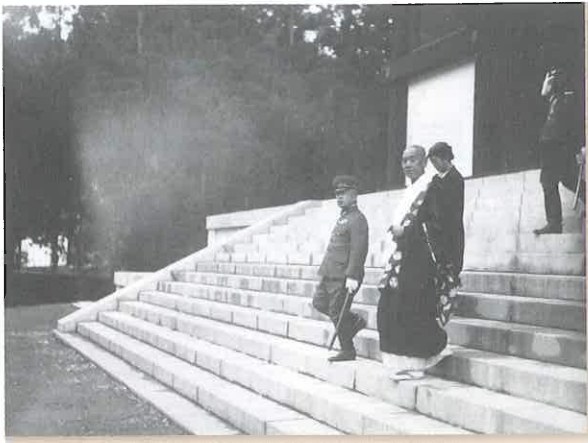


写真3 近藤本玄執行の案内で加監巡拝

いました。しかし、これは擲弾筒という歴とした兵器です。手榴弾をより遠くに発射するためのものが一人が充填し、もう一人が発射し、二人一組で攻撃するのだそうです。六百から八百メートル先の目標周辺に打ち込み、爆発させ、爆風や破片で周囲数十メートルの人間を殺傷する兵器です。殺人のための武器がこんなに身近にあったことに衝撃を受けました。これが兵器に見えなかったことは、なんと平和なことかと、改めて平和の尊さを実感しました。

貴重なお話を寄せいただきました。中江様に深く御礼申し上げます。

(K)

李王殿下の高野山来山を報じた記事  
大阪朝日新聞  
昭和十六年六月二日(月) 五頁

昭和十六年六月三日(火) 二頁(夕刊)  
大阪朝日新聞(紀伊版)

昭和十六年六月三日(火)  
「李王・同妃両殿下」

高野山時報  
昭和十六年六月八日発行(九六九号)

※許可を得て下に転載します。

### 李垠 イ・ウン

一八九七年十月二十日

一八九七〇年五月一日

高宗の第七皇子で韓国李朝の最後の皇太子。日韓併合により王世子となり、日本の皇族に準じた待遇を受ける。大正九年(一九二〇)梨本官女子女王と結婚。陸軍士官学校卒業後、大日本帝国陸軍に入り、昭和十六年六月当時は陸軍中将。純宗の薨去に伴い、李王家を承継したが、日本国憲法施行に伴う王公族制度廃止により李王の地位を失う。昭和三十八年(一九六三)大韓民国国籍を回復し、夫人とともに帰国、昭和四十五年(一九七〇)七十三歳で死去した。

高野山時報 昭和十六年六月八日発行(九六九号)

李王・同妃両殿下  
御仁慈に一同感泣

書記、タイピストの菩提まで申わせらる  
大学では教練の御指導遊ばさる

去る六月一日午後四時五十分女人堂御着御登山遊ばされた李王・同妃両殿下には高野警察署長、近藤執行の御先導で沿道堵列奉迎の山内寺院、大、中学、修道院、小学生、各種団体等二千余名の町民に御会釈を給いつつ人力車にて金剛峯寺に御成り上段の間で藤村管長並本山重役に謁を賜い、別殿貴賓館に御宿泊、二日朝六時御起床、

沙羅の若芽や高野槇の梢に初夏の陽光すがすがし奥殿庭園に咲きはこる金雀枝、芍薬の花を賞でさせられつつお揃いで庭内を御散策、閑寂な法域の朝の一時を御過し遊ばされて同九時光森御附武官、林事務官、師団司令部附石井少将一同奈良大佐、安田県総務部長らを従えさせられ金剛峯寺を御出門、近藤、高峯、原田各執行等の御案内で御徒歩にて伽藍に向わせられ朱色ようやく物寂びて寂然と聳え立つ根本大塔を御撮影遊ばされ

金堂における藤村管長導師一山大衆八百余名皆参で嚴修の皇室御歴代並びに李王家御祖先の御法要および戦没将兵の慰霊法要に御参拝あらせられ、ついで殿下の思召により金剛峯寺に回向を御下命遊ばされた御在職以来の物故職員である部下司令部附書記安蘇谷主馬軍曹(三月十五日死去) 同タイピスト貴田貴美子(去月二十一日死去)さんの二名の菩提を弔わせられ、御慈みことに御厚き殿下には懇ろに御焼香遊ばされ、しばし敬虔な御祈念を捧げさせられたが肅然といならぶ出仕参列者は、襟を正して感泣した。

かくて伽藍西部諸堂御巡拝の御後人力車を連ねて大門に御成り、樹海をへだてて遠くかすむ淡路島や紀淡海峡の風光を御覧遊ばされて同十分靈宝館御着、堀田館長の御説明で数々の国宝を御熱心に御覧遊ばされ、金剛峯寺に御帰還遊ばされた。

午後は一時十分高野山大学に御成り約一時間に亘り全校学生の教練を御視閲色々御注意を給わり同大学図書館では梶尾博士の御説明で貴重圖書を御覧遊ばされ、再び人力車に召され美福門院高野山陵に御参拝あらせられ、一ノ橋から御徒歩にて奥之院に御参進、英照皇太后御宝塔、御歴代仙陵、奥之院灯笼堂、祖廟など御巡拝の御後、裏参道を人力車に召されて同四時再び金剛峯寺に御帰還御少憩の御後、同四時三十分藤村管長の御見送りを受けさせられ同寺御出門かくて両殿下には一山住侶、町民沿道に堵列奉送の裡に同五時一分高野山駅御発御帰還遊ばされた。

(旧字旧仮名を現代表記にあらためました)

## 新収蔵品の紹介

## 釈迦文院蔵 重要文化財

## 大日如来坐像

木造 像高 58.7 cm



髻

今夏、釈迦文院より本尊大日如来坐像をお預かりし、収蔵しましたのでご紹介いたします。胸前で智拳印を結ぶ金剛界の大日如来です。

木造で一木割彫造という技法で造られています。本像はリズミカルに表された脚部の衣文や、薄布の質感、スマートな体つきなどから平安時代後期（十二世紀）頃の製作と思われる。

平安時代後期の仏像は、柔和で穏やかな表情が多いのですが、本像はさりとした切れ長の眼が非常に特徴的で、穏やかでありながら、理知的な表情を作り出しています。平安

時代後期の貴族に好まれた像とは少し違っており、本像の作者が気になる場所です。

腰に巻く布の形に、奈良仏師（奈良に住んで活動していた仏師。後に運慶、快慶の慶派となる）が古代の仏像から学び取って用いていた形と共通する点がありますので、本像の作者も奈良仏師かそれに近い仏師ではないかと推測されます。

本像のもう一つの大きな特徴は、高く結われた髻の上に八葉の頂蓮を載せることです。頂蓮はふつう不動明王が頭に載せていますが、大日如来が頭上に頂蓮を載せる例は他にほ

とんどありません。似た形が高野山西南院大日如来坐像にあります。西南院像の場合は髪を結って花形に表した莎髻と呼ばれるもので、頂蓮の釈迦文院像とは少し意味合いが違います。この形がどこから来たのかはつきりしませんが、西南院像は興教大師覚鑿によって建立された大伝法院本尊像（現在は失われている）との関わりが指摘されています。釈迦文院像も関わりがあるのでしょうか。

以上のように、本像には他の同時代の仏像とは異なる特徴を持つている点が特筆されますが、今後の研究の進展で非常に注目され、重要な位置付けをされるであろう、殊に貴重な御像ということになります。（T）

# 最後の博物館実習生を受け入れました

当館では、平成二年より断続的に博物館実習生を受け入れてきました。今年度は八月一日(月)から五日(金)にかけ、高野山大学の博物館実習生三名を受け入れましたが、諸事情により、「最後」の実習生となりました。

五日間という日程の中で、朝一番の作業である館内の掃除・ガラス拭きに始まり、受付応対や展示室の管理などの基本業務、続いて絵画・彫刻・書跡・工芸(刀剣)などの文化財の取り扱い、調書の取り方、写真撮影の仕方などについて実習しました。さらには、展覧会の構想から開催まで、展示品解説文の執筆など、実際の展示に関する様々な作業についても理解を深めました。山内の指定文化財(建造物)見学では、大門の上にも登りました。最終日には、口頭での展示解説を実践。各自担当する展示室を決め、持ち時間は十五分です。準備期間が短かったにも関わらず、それぞれ工夫を凝らした解説を聞くことができました。

実習生のみなさん、おつかれさまでした。我々教える側にとっても、勉強になった五日間でした。

## 〈実習生のみなさんの所感〉

この五日間の実習は、本当に内容の濃い、充実したものでした。大学の講義では経験することの出来ない実践的なことをたくさん体験することが出来、良い経験をすることができました。ここで得た経験を糧に、これからも勉強し、また様々な文化財をたくさん見て、目を肥やしていく立派な学芸員になるよう努力していきたいです。今回の実習を受け入れて下さった霊宝館の職員の皆様には本当に感謝しております。ありがとうございました。

密教学科四回生 堀部 泰博



今回霊宝館で五日間の実習をさせていただいて一番驚いた事は学芸員の方々の仕事の多さと多様さでした。展示以外にも毎日の掃除や、収蔵庫にこもっての調査などあまり目立たないけれども霊宝館の事を一番に考え、影で霊宝館を支えられていました。僕たちはその作業を実際に体験させていただきその大変さを知りました。この実習で教えていただいた事を生かして今後は文化財と触れ合っていきたいです。

密教学科四回生 宮地 央忠



五日間の実習を通して、文化財を守り、そして伝えていくことの大切さを実感することができた。学芸員という仕事を少しではあるが経験できたことで、これからまた、より一層興味を持つことができるように思う。そして、ここで学び得たものを、卒業後自坊に帰ってから役立てていきたい。高野山という山全体が文化財であふれている貴重な場所を実習できたことをありがたく思う。

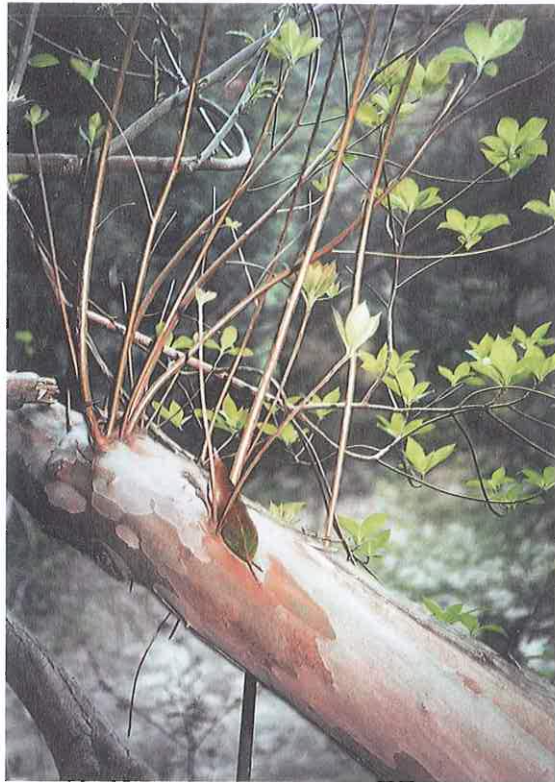
密教学科四回生 山下 良子



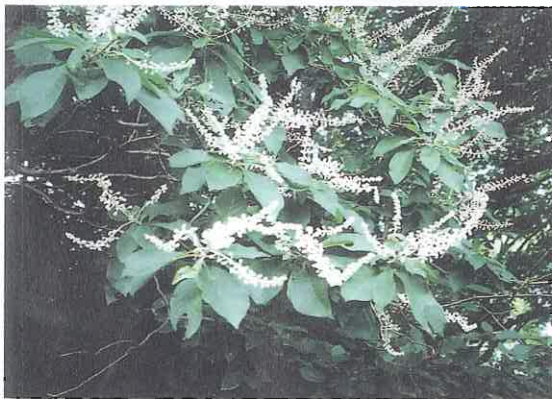
## 霊宝館の庭園

## リョウブ・令法・はたつもり・猿滑

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭



早春の新葉・若葉と幹



盛夏の緑葉と花

霊宝館の庭園では、人によって植えて育てられているもの、植えられたのか自ら生えて生長したのか判然としないもの、明らかに自生と判るもの、草本・低木・小高木・高木・藤本など多種（品種も含む）多様な植物の観察ができます。

それらのうち、庭園内の、その場所に、植えられたのか自生であるのか断定できないリョウブが、この夏も葉の重なり合った枝先に遠目には

粒状に見える乳白色の小さな五弁花を房（穂）状につけていました。

この木（樹）は、リョウブ科・リョウブ属、わが国では一属一種の落葉広葉小高木で大木となる樹種ではありません。高野山では乾燥した日当たりのよい雑木林の林内や山道端の斜面、人工林の縁などに自生しています。

リョウブには令法の字があてられています。往時、飢饉に備えて、

時の為政者（官）が民に対し、この木の保護育樹、山畑や里畑の周囲や身近な空き地などに栽植することを法の定めるところによって命令したことによるといいます。

つまり、法令・令法、れいほう、りょうぼうから、和名がリョウブとなつたということです。

ぎょうぶ・じょうぶ、じょうぼ・ひょうぶなどという方言名も遺っています。

食用とされたのは、早春、まだ冬枯れの季節、少し離れたところからでは明るい黄緑色の花かと思紛う新葉・若葉。それを摘み集め、茹でて水に浸して晒し、乾燥させて貯え、水でもどして米に混ぜ炊き「令法飯」、餅に搗き混ぜて「令法餅」、お茶代わりの「令法茶」、浸し物、和え物、大豆などと混ぜた煮物などにされたといわれます。

このような植物を人為分類では食用植物の中でも、特に救荒植物として使います。

古歌集の「永久百首」や「夫木和歌抄」などでは、「はたつもり」の名で登場し、衣笠内大臣や信實朝臣は、この「はたつもり」と「若葉つむ」を結びつけて詠んでいます。

はたつもりには「畑つ守」の字があてられていることがあります。

成木から老木になるにつれて幹の古い外皮が剥げおちてなめらかになり、茶褐色の光沢が。そのことによる、さるすべり（猿滑）、さるなめ・さるなめり（猿滑）などの別称や方言名もあり、この幹材は床柱や装飾建材などとしても。

秋には花の後にできる小さな実（種子）が成熟し、日光のよく当たる葉は鮮やかな橙色や紅黄色に色を変えますが、野趣は失せません。